

令和7年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和7年4月15日（火）

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

荏原平塚学園

国語科

I <定着状況についての概要>

2年:「知識・技能」「思考・判断・表現」の領域においては、全国の平均を上回っている。しかし、区の平均は下回っている。

3年:「知識・技能」の領域においては、区・全国の平均を上回っているが、「書くこと」の文章を書くことの問題については区・全国の平均を下回っている。「思考・判断・表現」の領域においては、全国の平均を上回っている。しかし、区の平均は下回っている。

4年:「知識・技能」の領域においては、全国の平均を上回っている。「思考・判断・表現」の領域については区・全国の平均を上回っている。

5年:「知識・技能」の領域においては、区・全国の平均を上回り、「思考・判断・表現」の領域については区の平均は下回っている。

6年:「知識・技能」及び「思考・判断・表現」の領域において、区・全国の平均を上回っているが、言語事項の「敬語」の定着確認の問題のみ区・全国の平均を下回っている。

7年:「漢字を読む」「文章を書く」以外のすべての領域・問題で区の正答率を下回っている。

8年:「言葉の特徴や使い方に関する事項」の領域、「漢字を書く」の問題以外のすべての領域・問題で区の正答率を下回っている。

9年:すべての領域・問題で区の正答率を上回っている。

II <具体的な課題>

2年:文章の中の重要な語を考えて選び出すこと。相手に伝わるように、経験したことに基づいて話すこと。

3年:伝えたいことを明確にし、簡単な構成を考えて文章を書くこと。

4年:ローマ字の読み方や漢字の読み書きを、正確にすること。

5年:説明文の内容を正しく読み取り、理解すること。

6年:敬語表現について正しく理解し、適切に使うことができるようになること。

7年:基本的な知識や文章を読む力、書く力を全体的に涵養していくこと。

8年:全領域において、正答率を上げること。特に、目的に応じて必要な情報に着目して内容を解釈する力を伸ばすこと。

9年:全領域において、正答率を上げること。特に、書くこと、読むことの正答率を上げること。

Ⅲ<課題の原因として考えられること>

- 2年:まとまった文章の要旨を捉える経験が不足している。また、相手に関心をもって話したり聞いたりする経験が不足している。
- 3年:順序を考えて、まとまりのある文章を書く機会が不足している。写真や絵の多い本を好んで読む傾向が強く、物語や説明的文章を読む経験が不足している。
- 4年:ローマ字表記の読み方をまだ覚えていないものがあるため、読めていないと考えられる。また既習の漢字が正確に定着されておらず、取りこぼしが見られる。
- 5年:相手や目的を意識して、伝えたいことを明確にして、文章を書くことが弱い。
- 6年:日常的に正しい日本語を用いることができていない。ら抜き言葉であったり、文章で書き表すときに敬体と常体が混在してしまったりする。また、目上の人に対して、正しい敬語表現を用いて話すことができていないことがある。
- 7年:これまでの国語の学習が定着していないことが考えられる。
- 8年:基礎的な知識・技能が身に付いていない。情報に着目した内容の解釈については、文章の中で必要な箇所印をつけたり、情報を観点別に関係づけたり整理したりする能力が身に付いていない。
- 9年:解答に自信がなく書けない生徒がいること。また自分の考えを整理し、言語化できていない生徒がいること。

Ⅳ<課題解決のための方策(取り組み指標)>

- 2年:とくに説明文の学習において、筆者が伝えたいことやテーマについて考え、確認する機会を必ず設ける。また、相手意識をもって話したり聞いたりする活動を、国語科だけでなく設定して経験を増やす。
- 3年:読み聞かせや本の紹介を通して、様々な種類の本に触れる機会を増やしていく。経験したことを文章に書く機会を増やし、他教科の書く活動でも簡単な構成を考えるよう意識をもたせていく。
- 4年:タブレットのタイピングや英語の学習等、ローマ字に触れる機会を増やしていく。漢字の学習では、既習の漢字を作文などで活用させて書く意識をもたせていく。
- 5年:叙述内の言葉の意味や文章の内容を確認する時間を設定してから単元学習に取り組む。確認した語句を使って文章を使う問題を解いたり、ミライシード使って語彙力をつけたりしていく。
- 6年:日常生活から正しい言語表現を用いて文章を書いたり、話したりできるような指導を行う。敬語の中にも、尊敬語・謙譲語・丁寧語があることを再認識させ、ある表現を敬語表現に直すような活動も取り入れていく。
- 7年:授業内で説明的文章や文学的文章の基本的な読解の仕方を学習していく。
- 8年:授業内で[知識及び技能]の領域と「読むこと」の力を重点的に身に付けさせ、情報を整理する活動や指導を行っていく。
- 9年:授業を通して考えを言語化できるよう、特に「読む力」、「書く力」を身に付けさせる。

Ⅴ<次年度の数値目標(成果指標)>

- 前期課程次年度は、全学年で区の平均正答率を上回ることを目指す。
- 後期課程次年度は、8、9学年で区の平均正答率を上回ることを目指す。

社会科

I <定着状況についての概要>

4年:「知識・技能」「思考・判断・表現」の領域においては、区・全国ともに平均を上回っている。特に、「思考・判断・表現」は、全国平均を10点以上回る結果となっている。

5年:「知識・技能」「思考・判断・表現」において、区の平均及び全国平均を上回っている。

6年:「知識・技能」の領域において、区の平均及び全国平均を下回っている。「思考・判断・表現」の領域においては、区の平均は上回っているが、全国の平均は下回っている。

7年:「知識・理解」「思考・判断・表現」のすべての観点で目標値・区平均正答率・全国平均正答率を上回っている。

8年:「知識・理解」「思考・判断・表現」のすべての観点で目標値・区平均正答率・全国平均正答率を下回っている。

9年:「知識・理解」「思考・判断・表現」のすべての観点で目標値・区平均正答率・全国平均正答率を上回っている。

II <具体的な課題>

4年:「工場の仕事について」の資料の読み取り。

5年:資料(地図やグラフなど)の読み取り。

6年:全体的に知識の定着、特に「国土の自然などの様子」の内容

7年:「国事行為」、「本居宣長」の内容

8年:「中世の日本」の観点で、全国平均を上回っているが、それ以外の観点では下回っている。

9年:「ヨーロッパ人との出会いと全国統一」「江戸時代」「明治時代」。

III <課題の原因として考えられること>

4年:基礎的な知識が、定着していない。また、グラフや文章等から情報を読み取れていない所がある。

5年:地図記号の理解や、資料から読み取った情報を文章化する力が不十分である。

6年:知識が必要な問題に対する正答率が低くなっている。

7年:基本的な知識の定着がなされていないこと、資料の読み取りの訓練がなされていないこと。

8年:反復練習の不足、また複数の資料を読み取り考察する部分に不十分なところがある。

9年:歴史的分野の基本的な知識の定着がなされていない。資料の読み取りの訓練がなされていない。

IV<課題解決のための方策(取り組み指標)>

4年:様々な動画を活用して、概念的な情報を想像しやすくさせ基礎・基本の定着を図る。また、問題文をよく読み、教科書に載っているグラフや表を読み取る機会を増やして、読み取る力の向上を目指す。

5年:様々な資料を読み取る活動を多く取り入れる。さらに、資料から分かることについて文章化したり、他者に分かるように表現したりする機会を増やす。

6年:社会科においては知識を暗記することも必要であることを理解させる。単語の確認や反復練習の機会を増やし、知識を定着させる。

7年:インプットとアウトプットの場面を授業で交互に取り入れる。また、小テストの実施などによって反復練習する機会を増やし、知識を定着させる。

8年:復習や小テストを行うことで、基礎的・基本的な内容の定着を図る。また資料を比較し正確に読み取る演習を実施していく。

9年:受験に向け資料に関する演習を入れながら、知識の定着をはかるために繰り返し学習をおこなっていく。

V<次年度の数値目標(成果指標)>

前期課程次年度は、全学年で区の平均正答率を上回ることを目指す。

後期課程次年度は、全学年で区の平均正答率を上回ることを目指す。

算数科・数学科

I <定着状況についての概要>

2年:「知識・技能」「思考・判断・表現」において、全国平均及び区の平均を上回っている。「主体的に学習に取り組む態度」においては全国平均と同水準である。

3年:「知識・技能」「思考・判断・表現」において、全国平均及び区の平均を上回っている。

4年:「知識・技能」「思考・判断・表現」において、全国の平均を上回っているが、どちらも区の平均は下回っている。

5年:「知識・技能」「思考・判断・表現」において、区の平均を上回っている。

6年:「知識・技能」「思考・判断・表現」の領域においては区・全国の平均を上回り、「主体的に取り組む態度」の領域においては全国の平均を上回っているが、区の平均を下回っている。

7年:「知識・技能」「思考・判断・表現」においてどの領域でも、区の平均及び全国の平均を上回っている。

8年:「知識・技能」において区の平均正答率を下回っているが、全国平均正答率を上回っている。「思考・判断・表現」において、区の平均正答率及び全国平均正答率を上回っている。

9年:「知識・技能」「思考・判断・表現」において、区の平均正答率を下回っているが、全国平均正答率を上回っている。

II <具体的な課題>

2年:100までの数、文章問題(求小の場面)

3年:10000までの数、繰り上がり・繰り下がりが2回あるたし算・ひき算、かけ算(もとになる数)

4年:掛け算・割り算の文章問題・棒グラフの読み取り。

5年:わり算(3桁÷2桁)、計算のきまり、変わり方調べ。

6年:円グラフや帯グラフ、平均、割合

7年:単位量当たりの大きさについてと、いろいろなグラフの読み取り。

8年:比例と反比例、平面図形、データの分野。

9年:連立方程式や図形の性質について。

Ⅲ<課題の原因として考えられること>

2年:設問の内容を正しく読み取ることができていない。正しく計算する力が不十分である。

3年:文章問題を正しく読み取る力、もとなる数の理解が不十分である。

4年:表を正しく読み取ることができていない。倍を求める計算への理解が不十分である。

5年:大きい数におけるわり算の筆算の技能が定着していない。複雑化した文章問題を正しく読み取る力が不十分である。

6年:与えられた情報から必要な部分を読み取ることや、基準量と割合から比較量を求めることの理解が不十分である。

7年:小学校の時に習った単位量の考え方や、グラフについての知識の定着が不十分である。

8年:関数の基本的な知識や表、式、グラフの関係、平面図形やデータの見方についての知識の定着が出来ていない。

9年:基本的な数式処理や図形の性質についての知識の定着が不十分である。

Ⅳ<課題解決のための方策(取り組み指標)>

2年:日頃から設問を読む際に、どんな解答が求められているのか考える習慣をつける。

3年:たし算・ひき算は反復練習する機会を増やし、確実な習熟を図る。文章題を読んで分かることを、短い言葉や図で整理する経験を増やす。

4年:倍を求める様々な問題に取り組み、倍を求める時と差を求める時との違いを身に付けさせる。

5年:大きな数におけるわり算の筆算に繰り返し取り組み、習熟を図る。四則演算が組み合わさった文章問題において、文章から読み取れる情報を整理しながら立式できるようにする。

6年:円グラフや帯グラフなどの様々な資料を読み取り、基準量と割合から比較量を求め、それらを比べる活動などを通して、資料を活用する力を高める。

7年:式の計算や一次方程式などの文章問題などで単位量についてが出てきたとき、基本事項の確認をするとともに、データ領域での振り返りを充実させる。

8年:関数や図形、データの各単元で7年生の復習を丁寧に行うことで基礎を定着させる。

9年:数式処理の練習を積み重ねるとともに、各単元でこれまでの振り返りを行う。

Ⅴ<次年度の数値目標(成果指標)>

前期課程次年度は、全学年で区の平均正答率を上回ることを目指す。

後期課程次年度は、全学年で区の平均正答率を上回ることを目指す。

理科

I <定着状況についての概要>

4年:「知識・技能」「思考・判断・表現」は区・全国平均を上回っている。

5年:「知識・技能」は全国平均を上回っているが、区平均をやや下回っている。「思考・判断・表現」は区・全国平均ともにやや上回っている。

6年:全体として全国平均をやや上回っている。

7年:全体として全国平均をやや下回っている。

8年:「基礎」「活用」とともに区・全国の平均を大幅に下回っている。

9年:「知識・技能」「思考・判断・表現」とともに区・全国平均を上回っている。

II <具体的な課題>

4年:こん虫の育ち方

5年:1年間の動物の成長、天気の様子と気温、物の体積と力

6年:思考力を要する知識の活用や用語の確認

7年:思考力を要する学習内容の活用問題

8年:「基礎」に課題が多い。観点・領域に関係なく全般的に7学年の内容が身につけていない。

9年:気象領域の問題

III <課題の原因として考えられること>

4年:基礎的な知識が定着していないため、資料を読み取り、結果を推測することができていない。

5年:実験や観察などの実体験を伴った活動が少ない単元は、知識定着が低いと考えられる。

6年:実験や観察の結果から考察し、言語化して文章にすることが苦手であると考えられる。

7年:事象を考察する力、自身の考えを表現する力が十分に身につけていない。

8年:観察・実験など実体験を伴った活動の不足。知識の定着を図る活動の不足。

9年:個別の事象を関連付けて思考する力が身に付いていない。

IV<課題解決のための方策(取り組み指標)>

4年:生き物のからだのつくりや育ち方について実体観察したり動画で見たりして、知識を確実に身に付けさせる。また、観察・実験をした後は、どんなことがわかったか考察を重点的にする。

5年:生き物や植物单元でも実体を観察したり動画で見たりして、知識を確実に身に付けさせる。また、実験や観察の結果をしっかり押さえる。

6年:基礎知識を反復して定着させ、自分の考えや意見を文章にする機会を増やす。

7年:実験や観察の結果をもとに何が明らかになったのかを説明させる。自分の考えを持って実験や観察を行わせる。

8年:観察・実験を通して、理科への関心・意欲を高めることで、自ら学ぶ姿勢を身につけさせる。

9年:授業内で個別の事象を関連付けて思考する発問を増やし、考察を深めさせる。

V<次年度の数値目標(成果指標)>

前期課程次年度は、全学年で区の平均正答率を上回ることを目指す。

後期課程次年度は、全学年で区の平均正答率を上回ることを目指す。

英語科

I <定着状況についての概要>

6年:「知識・技能」「思考・判断・表現」すべての観点において、区・全国平均を上回っている。

7年:「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点において、全国平均正答率は上回っているが、区の平均正答率は下回っている。

8年:「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点において全国平均の平均正答率を上回っている。

9年:「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点において、区平均・全国平均正答率を上回っている。

II <具体的な課題>

6年:英作文(書く)、基礎知識の活用

7年:例文を参考にして書く英作文

8年:場面に応じて書く英作文、情報に基づいて書く英作文

9年:長文の読み取り、場面に応じて書く英作文

III <課題の原因として考えられること>

6年:単語を選んで文章を作る問題は正答率が低い。4線に正しくアルファベットを書くことが苦手である。

7年:アルファベットの書きが定着していない。英作文問題に関しての無回答が目立つ。

8年:与えられたテーマ(場面や情報)について、問題の内容を理解しているが、どんな英文法を使い、何をどう表現すれば良いか、把握していない。または、英語で表現したくても、その既習表現を使えば良いか、理解していない。

9年:長文問題の全文を読み、全ての内容を理解することに集中し、その後問題に解答しているため、概要を読み取ることができていない。場面の内容を理解し、その場面から伝えたい事を連想できるが、それを英語でどのように表現することができない。

IV<課題解決のための方策(取り組み指標)>

6年:単語を使った英作文に慣れさせるようにする。各単元に例文をもとに自己表現の文章を作り、まずは正しいアルファベット、そして正しい英文が書けるよう練習をしていく。

7年:アルファベットの書きの練習と確認を授業内やテストなどで徹底する。授業内外で多くの英文に触れさせることにより、インプットを増やし、例文をもとに、自分で英作文する機会を増やしていく。

8年:正しい英文法を活用することだけでなく、与えられたテーマ(場面や情報)を日常生活に置き換えて、自分が思いつきやすい英語表現を活用し、コミュニケーション活動を行う。そして、相手にその内容を英語で伝え、自分の意思が通じるという達成感をもたらせる。形式的な英語表現に加えて、自分が思いつく既習の英単語や英文法を活用し、自分が理解できる簡単な英語表現でコミュニケーションする。そのために、ICT教材(ロイロノートとまなビューア)にて、発音、教科書のストーリーでの会話表現、プレゼンテーション(英作文と発表活動)を実践し、言語表現力を高める。

9年:与えられたテーマ(場面や情報)において、自分が思いつきやすい英語表現を活用し、場面を設定したコミュニケーション活動を行う。ICT教材(ロイロノートとまなビューア)にて、正しい英語発音、教科書のストーリーでの会話表現、プレゼンテーション(英作文と発表活動)を実践し、言語表現力を高める。

V<次年度の数値目標(成果指標)>

前期課程次年度は、正しくアルファベット、正しい英文を書くことができるようにする。

後期課程次年度は、条件や内容に即した英文を正しく、自分の力で書くことができるようにする。ICTを用いた音読練習を行う。

全学年で区の平均正答率を上回ることを目指す。